

現代リビア政治における「部族」と「地域」 ——カッザーフィー政権移行期の支配アクターに着目して——

田中 友紀*

Tribalism and Localism in Modern Libyan Politics:
A Study of Ruling Actors in the Transition Period from the Kingdom to Qadhdhāfī Regime

TANAKA Yuki

This paper examines the appointment of political elites and the transformation from the United Kingdom of Libya to the founding of the Great Socialist People's Libyan Arab al-Jamāhīriya established in 1977.

First, this paper analyzes how Mu'ammār Qadhdhāfī took power after the 1969 coup d'état using the perspectives of Libyan tribalism and localism as its theoretical framework. In particular, localism is appropriate for analyzing modern Libyan politics because the United Kingdom of Libya was formed in 1951 by the three regions—namely, Tripolitania, Cyrenaica and Fezzan.

Second, to demonstrate the continuity and transformation of the political elites, this paper focuses on the allocation of political posts in the Kingdom of Libya (1951–69). During the federal era, the local tribal leaders obtained ministerial posts in the local governments; however, the central government abolished the federal system in 1963. The allocation of political posts to the Cyrenaican notables engaged with the King's aides, caused an imbalance among these regions. Additionally, the fact that the Sanusi did not assume the features of a ruling family; Herb (1999) indicated that the more political posts which were allocated within the ruling family, the more resilient the governments were.

In 1969, the statement of the Free Officers Movement promised to root out corruption and guarantee equality among the Libyan citizens. However, this analysis shows that Qadhdhāfī appointed members of the prominent tribes of Cyrenaica as ministers and he made use of their power to manipulate the political institution and security organizations. Thus, despite his promises, Qadhdhāfī included the ousted regime. Qadhdhāfī deeply understood how difficult yet important it was to manipulate the stability of Libya's three regions and its tribal society.

I. はじめに

2011年、チュニジア・ジャスミン革命に端を発した一連の反体制運動は、中東・北アフリカ諸国に瞬く間に伝播し、いくつもの長期独裁政権を崩壊させた。リビアにおいても、NATOの援護を受けた反体制派が42年間続いたムアンマル・カッザーフィー(Mu'ammār al-Qadhdhāfī)政権を転覆させた。あれから5年、今なおリビアは泥沼化した内戦状態から抜け出せず、民主化移行プロセスは遅々として進まず安定した政治運営には程遠い状況が続いている。

このような不安定な現況とは対照的に、1969年に同国で発生した軍事クーデタは「無血革命」であり、体制転換は比較的円滑に進んだ。ナセルの革命思想に影響されたカッザーフィーを中心とする自由将校団は、リビア王国の君主であるイドリース(ムハンマド・イドリース・マフディー・サ

* 九州大学大学院比較社会文化学府国際社会専攻

ムスィー Muḥammad Idrīs al-Mahdī al-Sanūsī)から権力を奪取することに成功しリビア・アラブ共和国を樹立した。この共和国時代(1969-1977年)、自由将校団の中心メンバーは革命指導協議会(RCC: the Revolutionary Command Council: Majlis Qiyāda al-Thawra)を結成し、RCCは国の最高意志決定機関となった。この政権移行期にはいくつかの政治的危機があったが、そのたびにRCCの中心であったカッザーフィーはエリートの排除や取り込みを行い、安定した政権運営を模索してきた。本稿では、1969年前後の体制移行期における支配アクターを詳しく解析し、政権移譲が円滑に進み体制が安定した理由を考察していきたい。

1. 本稿の位置づけ

現代リビア政治研究の質と量は、他の中東・北アフリカ諸国の研究と比べると劣っていると認めざるを得ない。その中でもカッザーフィー政権の実相に迫る本格的な学術研究は存在しない、と言っても過言ではないだろう。「カッザーフィー」「現代リビア」という言葉がタイトルに含まれる体制研究でさえも、「なぜカッザーフィーのクーデタは発生し、そして成功したのか」という点ばかりに着目している。これらの研究では、旧宗主国のイタリアや軍事統治を行った英国やフランスの公文書が一次資料として用いられ、王国時代末期は石油利権を再配分しない王政への不満やアラブ・ナショナリズムの強い影響が社会に蔓延し、カッザーフィーら自由将校のクーデタは必然性を持って出現したと説明された。すなわち、カッザーフィー時代の国内政治に関する研究はいずれも希薄であり、新聞報道のまとめの域を超えるものはなかった[Anderson 1986; Harris 1986; Vandewalle 2012; Wright 2010]。

このように現代リビア政治研究においては、カッザーフィーのクーデタが成功したのかという問いに始まり、その答えとして外部勢力に翻弄されたリビアの歴史や、アラブ・ナショナリズムが席卷した王政末期の時代背景が繰り返し説明されることが多かった。しかし、1969年クーデタが成功した要因がアラブ・ナショナリズムの機運であるというのならば、1970年のナセルの死でエジプトではアラブ・ナショナリズムが衰退したにも関わらず、反対にリビアで体制が安定したのはなぜだろうか。この問いに対する議論は、いまだかつて行われたことがなかった。

とはいえ、1969年以降のリビア国内政治についての分析は断片的ではあるが存在している。ただし、研究者とリビア、そしてカッザーフィー本人との関係もあったためか、新聞報道の域を超える情報や分析を提供した研究はほとんどなかった。本稿では、既存の研究とは一線を画し、カッザーフィー体制を構造的な観点から考察していきたい。

2. リビア政治の支配アクターについての先行研究

第二次世界大戦後、1951年にリビアは連合王国として独立を果たした。このリビア王国時代については、マジード・ハッドゥーリー [Khadduri 1963]の研究が最も詳細で実証性が高い。この研究では、英国の公文書の解析や政治エリートへの聞き取り調査により、歴史的形が異なる3つの地域(トリポリタニア・キレナイカ・フェザーン¹⁾)を1つの国家として統合する難しさが解説された。特に、1951年以前より王国中央政府とトリポリタニア地方政府が激しく相克していたことが示され、その事例として議論が大きく割れた制憲委員会やボイコットが相次いだ1952年の国民選挙が

1) リビア連合王国の地域区分は、タラブルスが「トリポリタニア」、バルカが「キレナイカ」、ファッザーンが「フェザーン」と一般化されている現状があるため、本稿ではこれらの呼称を用いる。また都市名でもあるタラブルスであるが、地域区分と区別するため「トリポリ」とする。キレナイカ最大都市バンガーズイーは、一般的な呼称にならない「ベンガジ」とする。

挙げられた。この研究の副次的な産物として、王国時代の伝統的な名望家や部族の詳細、その対立関係が細かく伝えられた。

他方、カッザーフィー体制の政治研究については、国際関係論の視点から石油や大量破壊兵器をめぐる交渉が論じられることはあったが、国内政治についての分析はほとんど進むことがなかった[St. John 1987, 2002; Vandewalle 1998]。リリアン・クレイグ・ハリス(Lillian Craig Harris)は、カッザーフィー体制研究が進まない理由として、そもそも研究者の関心がリビアに向いていないことや、現地調査に大きな制約があったことを挙げ、現地へのアクセスや一次資料の収集に困難が常に付きまといっていることを示した[Harris 1986: 139]²⁾。

しかし、21世紀に入りリビアがテロ事件の賠償や大量破壊兵器を廃棄して国際社会に復帰すると、政治制度やアクターに着目した新しい研究が見られるようになる。ハンスピーター・マッテス(Hanspeter Mattes)は、カッザーフィー体制の意思決定はどの機関で行われていたのかを論じ、今まで明らかになっていなかった公式・非公式の意思決定機関のごく概要を明らかにした。そして、権力の源泉であるはずの全国人民会議や国家元首である全国人民会議議長の役職は形骸化しており、公職にはついていない「革命指導者」のカッザーフィーに政策決定権限が委ねられていたことが結論として述べられた[Mattes 2011: 55-81]。

同様に、ベンガジ大学で教鞭を取ったアマル・ウバイディー(‘Amal ‘Ubaydī)も、1969年から2006年までのカッザーフィー体制下の政治エリートの特徴について論じている。ウバイディーは自身の人脈を生かした聞き取り調査によって、エリートのごく基礎的な経歴、その構成、そしてその変容を明らかにした。結論では、カッザーフィーが政治危機のたびに「暫定エリート(temporary elites)」を登用して困難を切り抜けたこと、また経年化するにつれてエリート構成が部族主義、特にカッザーファ族に偏向したことが述べられた。とはいっても、本論の中では部族という属性で政治エリートが解析されることはなく、むしろ出身地方(東部、西部などという区分)や教育程度などの属性によって分析が行なわれており、十分な議論が行なわれたとは言い難い[Obeidi 2011]。

3. 設問

これまで述べてきたように、カッザーフィー体制についての研究は国際関係、安全保障、石油経済関連が多く、カッザーフィーが行なった国内政治については実証度の高い研究がほとんど存在しなかった。論文や本の題名にカッザーフィーという固有名詞が含まれていても、資料の関係から1969年のクーデタまでの分析に紙面が割かれており、それ以降のカッザーフィー体制の実相に迫った研究は皆無に近かった³⁾。

本稿では、クーデタ以前の政権であるリビア王政期からカッザーフィー体制が安定する移行期を分析対象期間とし、カッザーフィーが新旧の支配アクターをどのように調整し政権を安定に導いたのかを明らかにしたい。この支配アクターとは、集团的アクターである政府や軍などの統治機構であり、またそれらを構成する個々の支配エリートである。

2) クーデタ直後より外国メディアはリビアから退去させられ、国内の報道機関は全て国営化された。国営メディアでは、革命プロパガンダが宣伝され続けることとなった。現在、リビアではカッザーフィー時代の公的文書の所持は禁止されており、法的罰則も設けられている。

3) カッザーフィー体制について論じるのは、体制批判と表裏一体であった。1969年の革命直後より、国外に住むリビア人は帰国を命ぜられ、命令を無視するもの、カッザーフィー体制を非難するものは次々と殺害予告を受けた。実際、1970年代から1990年末にかけて加害者不明のリビア人殺人事件がヨーロッパや中東を中心に発生した。例えば、共和国時代に外務大臣であったマンスール・ラシード・キーヒヤーがエジプトで拉致・殺害されている。

今回、本稿がこの支配アクターに着目して分析を進める理由は2つある。現在、カッザーフィー時代の公文書を手に入れることはほぼ不可能であるが、同時代の体制エリートに関する情報は、今なお聞き取り調査で収集可能であることが挙げられる。言い換えれば、エリートの属性(職位・出身地域・部族名・教育程度)に関する情報は齟齬が生じる可能性が非常に少なく、高い実証性を得ることができる。

もう1つの理由として、政治制度の特性上、支配アクターの構成内容を精査するしか体制分析ができないことが挙げられる。なぜなら、リビアでは1952年以降政党結成が禁止されており、さらに体制の正統性を担保するための形式的な選挙でさえも行われていなかった⁴⁾。つまり、既存の制度分析等の知見を取り入れることはカッザーフィー体制においては不可能であり、今のところ支配アクターを分析するしかカッザーフィー政権の長期存続を解明する方法はないと思われる。

このカッザーフィー政権の支配アクターを分析する視角は、支配エリートの属する「部族」と「地域性」である。最初に、この「部族」という視点について議論したい。先述したウバイディーによると、1980年代以降の政治ポストにはカッザーファ族が台頭したと言及されており、やはり「部族」という視角はリビア政治において重要な位置を占めると考えられる〔Obeidi 2011〕。しかし、実際「部族」という概念は人類学や社会学ではまだ論争中であり、明確に定義することが大変難しい。例えば、*The Sanusi of Cyrenaica* の中でエドワード・エヴァンズ＝プリチャード(Edward Evan Evans-Pritchard)が「部族(tribe)」という言葉を使用しているが、その定義は明確にされておらず自明のものとして用いている。さらにその研究では、キレナイカの「部族」が「領域」を巡って衝突をしていたことが明らかにされており、部族の帰属意識の中に「領域」という概念も含まれていることが示唆されている〔Evans-Pritchard 1949〕。

しかしながら、本稿における「部族(qabīla)」はアラブ社会で一般的に考えられているように、「血縁関係、父系の共通出自という帰属意識(アイデンティティー)を持ち、共通規範を有する集団」と定義する。エヴァンズ＝プリチャードが示すように、共通の地理的領域を有しているということも帰属意識の一部であると言えなくもないが、本稿ではリビアの「部族」という定義の中に「領域を共有する」という項目は含めない。なぜなら、エヴァンズ＝プリチャードが研究対象にしている時代はイタリアが部族の土地を没収する以前であり、現代リビアで部族は「領域」を共有していないからである⁵⁾。

他方、リビア王国時代の連邦制区分、つまりトリポリタニア・キレナイカ・フェザーンと呼ばれる「地域」も支配アクターを分析する視角としたい。先述したハッドゥーリーは、植民地時代にリビアの住民が「リビア人」と一括りで呼ばれることを嫌い、「キレナイカ人」「トリポリタニア人」「フェザーン人」と呼ばれることを好んだと著している〔Khadduri 1963〕。

確かに1951年の独立以前においては、この3つの地域区分は単なる行政区分や地理的区分だけ

4) カッザーフィー政権下でリビア・アラブ社会主義党(ASU)が結成されたが、その他の政党の結成は禁止された。1970年代にエジプト・シリアとの合邦計画が立ち消えとなり、その後1977年にジャマーヒーリーヤ体制が成立したためASUの活動は本格化しないまま廃止となった。

5) 部族が地域の境界を超えて存在している例もある。内陸部でよく見られる例(マカルハ族など)であるが、共通の出自に関する帰属意識を持ち共通行動規範で行動すれば、地域区分が異なっても同じ部族とする。反対に、遠い昔に共通の出自を持っているが共通のルールが存在しない場合は異なる部族集団とみなす。例えば、カッザーフィーの出自であるカッザーファ族は、キレナイカにもトリポリタニアにも存在する。ムアンマル・カッザーフィーの出身集団はトリポリタニアのカッザーファ族であったが、王国政府最後の首相はキレナイカのカッザーファ族に出自を持つワニス・カッザーフィー(Wanīs al-Qadhdhāfi)であった。カッザーフィーとワニスは、部族名を同じくするが長年の地理的隔絶により共有する規範が存在しなかった。また、リビアで「家族」という意味で使われるアーイラ(ʿāʾila)については、血縁や婚姻によって親戚関係がある人々の集団とする。例えば「シャルヒー家」というように呼称する。

ではなく、個別に独自のアイデンティティが形成されていた。例えば、マイヤー・フォーテスとエヴァンズ＝プリチャードは、20世紀初頭のアフリカ社会を「複数の部族集団が司法的・行政的に統合された、中央集権化した社会」と「部族間の関係がアナーキーな状態にある社会」の2種類に分類したが[Fortes and Evans-Pritchard 1940]、この2つの社会形態は独立以前のリビアにどちらも存在していた。例えば、キレナイカは、タリーカのサヌースィー教団(al-Tarīqa al-Sanūsīya)が頂点に立ち部族集団を司法面・行政面で統合・支配した、中央集権化した社会であったと言えよう。当時、イドリースの権威は部族長を上回っており、キレナイカの部族集団は互いに協力してイタリア支配に抵抗することにより、トリポリタニアへの対抗意識とキレナイカという高次の共同体への帰属意識を深めていった。

一方、トリポリタニアは「部族間の関係がアナーキーな状態にある社会」であり、部族集団間の関係はほぼ水平であった。オスマン帝国の行政官が撤退後のトリポリタニアでは、各部族は独自に権限を有しており、部族長や名望家が定期的に会合を行なう政治風土があった。このようにして形成された人々の出身地域に対する帰属意識は、カッザーフィー体制崩壊後においても自治政府の設立や連邦制の要求などから確認することができる⁶⁾。

それでは、以下に本稿の構成を示す。まず第II節では、トリポリタニア、キレナイカ、フェザーンの3地域という異なったアイデンティティが形成された歴史的経緯を説明する。第III節では、連邦制国家として独立したリビア連合王国が、1963年に連邦制廃止という政治的転機を経験することによって支配集団の構成がどのように変化したのかを、部族そして地域という点から明らかにする。特に、リビア王国の中で最高決定権を持っていたイドリースやその親戚である王族が当時どのような状況に置かれていたのかを、王国関係者への聞き取りや当時の新聞の分析を通して考察したい。第IV節では、カッザーフィーが行なったクーデタの背景やその後の政治の主要アクターであった革命指導評議会、リビア・アラブ共和国内閣のエリート構成を出身地域や出身部族の観点から明らかにする。最後に、王国時代とリビア・アラブ共和国における支配アクターの比較を行い、カッザーフィーがどのように支配アクターを操作して体制を安定させたのかを示していきたい。

II. 部族社会・地域性の歴史的形成

1. 植民地支配が強めた地域間の亀裂

かつて、現在のリビアを包含するナイル川の西に広がる大地を、古代ギリシャでは「リビー(Λιβύη)」と呼んでいたという。二千年の時を超え再びこの地を「リビア(Libia)」と呼んだのは、植民地支配を行なったイタリア(1911-42年)であった[Wright 2010: 4-5]。このイタリア支配まで、現在のリビア領が結合性を持ったまとまりとして存在した歴史はなく、トリポリタニア・キレナイカ・フェザーンという地域は別々に発展を遂げてきた⁷⁾。

19世紀に入ると、現在のリビア沿岸部はオスマン帝国に支配されたが、キレナイカ内陸部ではサヌースィー教団が勢力を広げていった⁸⁾。エヴァンズ＝プリチャードによれば、サヌースィー教

6) カッザーフィー体制崩壊後、キレナイカ(バルカ)地方評議会、フェザーン地方評議会が自治と連邦制による統合を要求している。

7) 古代、リビア東部沿岸部はギリシャに支配されていた。英語名キレナイカという地名はギリシャ植民都市のクレネー(Kρήνη)に由来している。他方、リビア西部の地中海沿岸部は古代ローマ人に支配され、トリポリ(タラプルス)・レプティスマグナ・サブラータという3つの植民都市が建設された。古代ローマ人はこれらをひとまとめにして、トリポリタニア(3つの都市)と呼んだ。

8) サヌースィー教団の創設者であるムハンマド・アリー・サヌースィー(Muhammad bin 'Alī al-Sanūsī, 以下大サヌースィー)は、1787年に現在のアルジェリアに誕生した。カイロのアズハルで学んだ後、メッカでイドリース教団を創設したアフマド・ビン・イドリース・ファースィー(Ahmad bin Idris al-Fāsi)に師事し、その後1837年

団は各部族に対して礼拝と修行施設であるザーウィヤ(zāwiya)を建設することを奨励し、その宗教的権威を背景にキレナイカの部族集団を支配下に置いたという⁹⁾。サヌースィー教団のキレナイカ自治はオスマン帝国から黙認されていた[Evans-Pritchard 1949]。

1911年、伊土戦争でオスマン帝国が敗北し、イタリア王国がリビア進出を開始した。当初、イタリア側は穏健な同化政策でリビア人を懐柔しようとしたが、キレナイカの部族集団は断固としてイタリア支配を受け入れることはなかった。しかし、1922年にムッソリーニが首相となり「レコンキスタ(国土回復運動)」が政治スローガンとして掲げられ、イタリア支配はより苛烈に変貌する。その影響を受けてイドリースを含むサヌースィー教団の中枢はエジプトに避難し、ウマル・ムフタル(‘Umar al-Mukhtār)¹⁰⁾はバラールサ族(al-Barā‘aṣa)を中心としたキレナイカの部族連合を率いて伊軍に抵抗を続けた。1930年初頭まで、キレナイカの部族連合は果敢に抵抗を続けていたが、ムフタルが伊軍に絞首刑に処された頃から抵抗運動は下火となっていった。

他方、トリポリタニアにおいてもアフマド・カラマーンリー(Aḥmad al-Qaramānī)がオスマン帝国支配下で王朝(1711-1835)を樹立し自治を行なうなど独自の動きが見られた。しかし、伊土戦争後にオスマン帝国関係者がトリポリタニアから撤退すると、新しい指導者を巡って部族間で激しい抗争が続くようになった。最終的に、ナフサ山地の有力部族の長であるスライマーン・バールーニー(Sulaymān al-Bārūnī)¹¹⁾やアブドゥッラフマン・アッザーム(‘Abd al-Raḥmān ‘Azzām)¹²⁾などが部族を糾合して「トリポリタニア連合戦線」を結成、1918年にはこの組織が前身となってトリポリタニア共和国(al-Jumhūrīya al-Ṭarābulusīya)が誕生した[宮地 1978: 106-107]。この共和国では、中東で初めてとなる民主的な選挙が執り行われるなど活発な動きが見られたが、5年足らずでムッソリーニ政権下のイタリアに吸収された。以降、ナフサ山地の有力部族長たちは首都トリポリには寄り付かず、他方で沿岸部の都市で金融を取り仕切っていた部族や名家がイタリアの植民地支配に協力して影響力を強めていった[Anderson 1986: 66]。

2. リビア王国成立に向けて

第二次世界大戦の結果、イタリア領リビアは連合国によって分割統治されることになった。トリポリタニアとキレナイカは国連委任領として英国軍に統治され、また内陸部のフェザーンは国連信託領としてフランス軍に支配された。キレナイカのイドリースとその側近は、トリポリタニアと共に併合されることを恐れ、イギリスと共謀して1949年6月にキレナイカ首長国(Imārāt Barqa)の建国を早々に発表する。しかし、新設された国際連合でキレナイカ首長国は承認されず、反対に同年11月の国連総会で旧イタリア領リビアには、「1952年1月までにリビア3地域を統合して独立すること」という決議が与えられた。リビアには高等弁務官のエイドリアン・ペルト(Adrian Pelt)が派遣され、3地域の代表¹³⁾から成る制憲委員会が発足した。

に同地でサヌースィー教団を創設した。その後、大サヌースィーは祖国がフランスに実効支配されたという報を開き、帰国を諦めてキレナイカに留まる事となった。以降、大サヌースィーはエジプトに近いジャグブーブ(al-Jaghbūb)を拠点として布教を開始した。

9) 宗教施設であるザーウィヤはキレナイカに多く建設されたが、遠くリビア西部沿岸やチャド、アルジェリア、ニジェール、スーダンにまでも広がりを見せた。

10) サヌースィー教団のザーウィヤの導師であった。キレナイカのみならず、リビア全土で最も英雄視されている人物といっていだろう。ムフタルの肖像画は、カッザーフィー時代の10ディナール紙幣にも描かれた。

11) バールーニーの出自はイバード派イマームの家系であった。

12) アブドゥッラフマン・アッザームは、のちにアラブ連盟を創立した[宮地 1978: 106]。

13) キレナイカではイドリースが、トリポリタニアではマフムード・ムンタシルが、そしてフェザーンではサイフ・ナースイルがそれぞれ制憲委員会代表を選出した[Toler 2013]。

しかし、制憲委員会では新しい国家建設をめぐる地域間で議論が紛糾した。トリポリタニア側は首都をトリポリとする共和制を希望し、超党派でトリポリタニア国民会議 (al-Mu'tamar al-Waṭanī al-Tarābulusīya) を結成して連邦制を志向するキレナイカ代表を激しく牽制した¹⁴⁾。反対にキレナイカは連邦制を支持し、同じくフランス軍事統治下にあったフェザーンも連邦制を要求した。フェザーンの最有力者であるアフマド・サイフ・ナースィル (Ahmad al-Sayf al-Nāṣir) は、連邦制に備えて 1950 年 2 月には 45 名から構成されるフェザーン議会を設立した [Habib 1979: 63–64]¹⁵⁾。

このような経緯で、ペルトは多様で複雑な帰属意識を持つ人々を国民国家として統合することは時期尚早と結論付け、最終的に 3 地域を連邦制で緩やかに結びつけて独立させることを決定した。この決定を受けて、連邦制に消極的であったトリポリタニアも 1951 年 3 月にトリポリタニア議会 (地方政府の前身) を立ち上げ、独立に向けての手はずが整えられていった¹⁶⁾。

III. 王国時代の支配アクター

1951 年 12 月 24 日、サヌースィー教団 4 代目指導者イドリースを君主に戴き、トリポリタニア・キレナイカ・フェザーンはリビア連合王国 (al-Mamlaka al-Lībīya al-Muttaḥida) として独立を果たした。この節では、王国時代を前期と後期に分けて支配アクターの構成を分析する。王国時代のアクターのエリート構成に着目して分析する理由は、カッザーフィー時代と王国時代のエリートを比較検討するためである。既存の研究では、王国成立から 1969 年のクーデタまでの支配アクターについて説明が行われていないため、ここに整理して記したい。

1. リビア連合王国時代 (1951–63 年) —— 3 つの地方政府間の相克

(1) 連合王国政府

王国時代の前期であるリビア連合王国の中には、リビア連合王国内閣 (以後、王国内閣) と宮廷内閣 (Dīwān)、そして 3 つの地方政府内閣の合計 5 つの内閣が存在した。最初に 3 つの地方政府を総括する王国政府の説明を行う。

リビア連合王国時代は約 11 年間続き、5 人の王国政府首相が誕生した。1951 年に発足した初代王国内閣の首相は、トリポリタニア・ミスラータの名望家出身であるマフムード・ムンタスィル (Maḥmūd al-Muntaṣir) であった。ムンタスィル家はオスマン帝国時代ではベイ (Bey) の家系であり、イタリア時代は植民政府に積極的に協力しトリポリの金融業界で財を築いた。マフムード・ムンタスィル自身はトリポリタニア地方政府の前身となったトリポリタニア議会を立ち上げ、その議長を務めていた [Ahmida 2009: 109]。トリポリタニア出身者を初代首相に据えたのは、地域間バランスに考慮した結果だと推察できよう。また、リビア連合王国時代の 5 名の王国内閣首相の内訳はトリポリタニア、キレナイカ出身者が 2 名ずつ、フェザーン出身者が 1 名であった。当時の人口比では

14) この時代にトリポリタニアで結成された主な政党は、アフマド・ハサン・ファキーフ (Ahmad Hasan al-Faqīh) が党首の国民党 (al-Ḥizb al-Waṭanī)、サリーム・ムンタスィル (Salīm al-Muntaṣir) が党首の統一国民戦線 (al-Jabha al-Waṭaniya al-Muttaḥida) であった。その他、労働党、リビア・パース党などが結成された [Habib 1979; Khadduri 1963: 84–88]。

15) フェザーンの代表は、アウラード・スライマーン族 (Awlād Sulaymān) のシャイフであるアフマド・サイフ・ナースィルであった。彼を中心としたフェザーン代表が連邦制を支持したのは、サヌースィー教団への宗教的忠誠とフェザーン域内での政治的・経済的利権を独占することがその目的だったと考えられる。サイフ・ナースィル家は、サヌースィー教団がキレナイカの地に辿りつく以前より内陸部に点在するオアシスを拠点に繁栄していた。19 世紀以降、トリポリとボンヌ王国を結ぶ交易ルートの中継地を支配して富を築いた。

16) トリポリタニア地方議会の全議員は、イドリースから指名された。この議長は、後の中央政府の首相となるマフムード・ムンタスィルであった [Habib 1979: 64]。

表① リビア連合王国(1951-63)・王国(1963-69)首相一覧

氏名(在任期間)	出身地域	首相就任以前の経歴	出身部族 (イドリースとの関係を含む)
マフムード・ムンタシル (在任 1951.12-1954.2) * 外相兼任 (再任 1964.1-1965.3)	トリポリタニア	トリポリタニア 地方議会議長 (同地方政府の前身) 制憲委員会・ トリポリタニア代表	・トリポリタニア名望家出身 (ムンタシル族) ・同族はオスマン帝国統治下では ベイであった。
ムハンマド・サーキズリー (在任 1954.2-1954.4) * 外相兼任	キレナイカ	首相 (キレナイカ首長国) 首相 (キレナイカ地方政府)	・トルコ系 ・旧オスマン帝国関係者、トリボ リバシャの末裔
ムスタファー・ビン・ハリーム (在任 1954.4-1957.5)	キレナイカ	カイロ大学・工学士 運輸大臣 (キレナイカ首長国) 公共事業大臣 外務大臣	・キレナイカ名望家 (バラサ族) ・エジプト・アレキサンドリア生 まれ ・サヌースィー家がエジプトに亡 命時に援助を行なう
アブドゥルマジード・カアバル (在任 1957.5-1960.10)	トリポリタニア	外務大臣 運輸大臣	・カフカス系 ・旧オスマン帝国関係者
ムハンマド・ビン・ウスマーン (在任 1960.10-1963.3)	フェザーン	厚生大臣 経済大臣	・フェザーン名望家出身 (サイフ・ナースィル家)
ムヒッディーン・フィキーニー (在任 1963.3-1964.1) * 外相兼任	トリポリタニア	パリ大学・法学博士 法務大臣	・トリポリタニア有力部族出身 (ラジュバーン族) ・父は対イタリア抗戦の英雄
フサイン・マーズィク (在任 1965.5-1967.7)	キレナイカ	内務大臣 教育大臣 (キレナイカ首長国) 首相 (キレナイカ地方政府) 外務大臣	・キレナイカ名望家出身 (バラサ族) ・娘がシャルヒー家に嫁ぐ
アブドゥルカーディル・バドリ (在任 1967.7-1967.10)	キレナイカ	農業大臣 経済大臣 厚生大臣 産業大臣 住宅大臣 情報大臣	・キレナイカ名望家出身 (バラサ族) ・出身部族はオマル・ムフタル 指揮下で伊軍に抵抗
アブドゥルハミード・バクージュ (在任 1967.10-1968.9)	キレナイカ	カイロ大学・法学士 法務大臣	・キレナイカ名望家出身 (バラサ族)
ワニース・カッザーフィー (在任 1968.9-1969.9)	キレナイカ	首相 (キレナイカ地方政府) 外務大臣 内務大臣 住宅大臣	・キレナイカ名望家出身 (キレナイカ・カッザーファ族)

(出所) [Europa Publications Limited 1951-1969]、各種報道、及び王国関係者(匿名)への聞き取り調査により筆者作成。学歴については現在判明している情報だけであり、これらが全てではない。

トリポリタニア出身者が多かったが、首相にはキレナイカ出身者が多く就任した(表①参照)。

王国政府の立法府である議会は、上院と下院からなる二院制であった。上院の議員定数は各地域平等に8名ずつ選出され合計24人で構成された。この上院議員の選出方法であるが、議員数の半分である12名は王が任命し、残りの12名は各地方議会が選出した¹⁷⁾。一方で、下院議員は小選挙区制で選出された。下院議員定数は人口比で割り当てられており、トリポリタニア35名、キレナイカ15名、フェザーン5名の合計55名が選ばれた [Khadduri 1963: 216]¹⁸⁾。しかしながら、上院が優越しているため、王の意向は常に政策に反映された。王国時代における下院の選挙は1952

17) 王の指名があればサヌースィー家の一員であっても上院議員になることが可能であった(リビア連合王国憲法第96条)。しかし、実際には王政下において王族は上院議員になっていない。

18) 下院の代議員は、2万人の住民につき1議員、もしくは2万人には足りないが1万人以上の場合に1議員が選出された(リビア連合王国憲法第101条)。だが1952年の選挙では区割りに対して激しい反発があり、ミスラータやトリポリを中心に選挙がボイコットされた。最終的に59の選挙区226の投票所で選挙が行なわれた。

年、1956 年、1960 年、1964 年、1965 年と 5 回行なわれている¹⁹⁾。

(2) 3つの地方政府

1951 年の独立時、リビア連合王国にはトリポリタニア・キレナイカ・フェザーンの 3 つの地方政府が誕生することとなった。この地方政府首相 (Wali) の任命は王が行い、自らに忠誠を誓う人物を王が指名することによって、王の権威や影響力を地方にも反映させようとした。例えば、キレナイカやフェザーンでは王と親しい関係にある有力部族の長が地方政府首相に選ばれている。キレナイカ地方政府の初代首相には、キレナイカ首長国首相を務めたムハンマド・サーキズリー (Muhammad Sāqizli) が任命され、1952 年にはキレナイカ首長国内務大臣であったフサイン・マーズィック (Husayn Māziq) が首相に就任、その後約 10 年間首相の座を明け渡すことはなかった。マーズィックはサヌースィー家と姻戚関係にあるバラサ族の出身であった。同じくフェザーン地方政府の首相も同地域で最有力であるサイフ・ナースィル家から選ばれた。同首相職は、1956 年に家長である父のアフマド・サイフ・ナースィルから息子のウマルに引き継がれている。また、同地方政府の他の大臣職人事も固定化しており変化することがなかった [Khadduri 1963]。

他方、トリポリタニア地方政府では少々事情が異なった。王国時代になってもトリポリタニア地方政府内では有力部族や名望家などの集団間のパワーバランスが均衡しており、同地方政府では頻繁に内閣改造が行われた。それだけでなく王が地方政府首相を選ぶという制度が地方自治の権利を侵しているという反発も沸きあがった。その結果、王国政府はトリポリタニア地方政府の反発を抑えるために各地方政府議会が選出する地方議会議長という役職を 1954 年より加え、さらに連合王国憲法に反しなければ各地域が独自に法を制定できることを認めた [Habib 1979: 70–71]。

2. リビア王国時代 (1963–1969) ——キレナイカ出身者への偏重

1963 年、憲法改正により連邦制が廃止されることになった。首相に就任したムヒッディーン・フィキーニー (Muḥy al-Dīn Fikīnī) は、既存の 3 つの地方政府を 10 の行政地域に再分割し行政官を派遣した²⁰⁾。フィキーニーはトリポリタニアのラジュバーン族のシャイフ家系の出身で、パリ大学で法学博士号を取得した人物であった²¹⁾。この改革を推進したフィキーニーは、リビアが石油輸出によって急激な経済成長を遂げたことを背景にリビア初となる 5 ヵ年計画²²⁾を発表し、加えて女性に対して参政権を付与するなど欧米的価値観も政策に導入した。

行政機関に目を向けると、憲法改正によって王国内の行政機関は内閣 (通常内閣) と宮廷内閣の 2 つとなった。1963 年以降の内閣では 2 人のトリポリタニア出身者が連続して首相となったが、それ以降はキレナイカ出身者が 4 人連続して首相の座に就いた (表①参照)。また、その他閣僚も主にキレナイカ出身者で構成された。キレナイカ出身の首相が地方政府ポストを失った同郷の有力者に閣僚ポストを与えたことは、イタリア抗戦の際の紐帯から鑑みればごく自然な流れだったと

19) 1952 年の選挙以降、政党の結成ならびにその活動は禁止された。

20) トリポリタニア 5 地域、キレナイカ 3 地域、フェザーン 2 地域の合計 10 の行政区域である。トリポリ (トリポリタニア、以下 T)・フムス (T)・ミスラータ (T)・ザーウィヤ (T)・ガリヤーン (T)・バイダー (キレナイカ、以下 C)・ベンガジ (C)・ダルナ (C)・アウバーリー (フェザーン、以下 F)・サブハー (F)。

21) 筆者が開取りを行なった匿名の王国政府関係者は、あくまで閣僚は個人のこれまでの経歴で選ばれており出自は関係ないと主張している。ちなみにパージターによれば、リビア国内には 1951 年の時点で 16 人の学士号取得者しかいなかったとされる [Pargeter 2012: 35]。

22) この 5 ヵ年計画では、内陸部のフェザーンからトリポリまでを貫通する道路の建設が予定されていた [The Libyan Mail 1968 (Aug. 4)]。

いえよう²³⁾。

このキレナイカ出身部族の中でも、サヌースィー教団と関係が深いバラサ族やウバイダート族(al-‘Ubaydāt)が首相・防衛・内務・外務・石油関連の重要ポストを得ていることは注目に値する。しかし、王国時代後半はバラサ族がより優位な位置にあったと考えられる。このバラサ族はイドリースの実母の出身部族であり、フサイン・マーズィクやアブドゥルハミード・バクーシュ(‘Abd al-Ḥamīd al-Bakūsh)など歴代首相を輩出している。またバラサ族は宮廷内閣で王に取り入り権勢を誇ったシャルヒー家とも親戚同士であった²⁴⁾(表①参照)。

3. 宮廷内閣——イドリースを取り巻く人々

ここでは、当時のリビアにおいて最大の政治的権力を持つイドリースと王族、そして取り巻く宮廷内閣についての考察を行ないたい。

リビア王国は18年で終焉した短命王朝であった。このイドリース王政は多くの点で他の頑健な中東の王政とは異なっていた。例えば、マイケル・ハーブは安定した王政運営には支配一族の規模の大きさと結束力の強さが必要であると論じ、イドリース王政では支配一族の協力体制が欠如していたために短命であったと指摘した[Herb 1999: 183–199]。同じく、ロジャー・オーウェンも特定の王制が長期継続するには、支配家系に権力を集中させ家系内の対立を押さえ込む能力が必要であったことを挙げている[オーウェン 2015: 79]。

リビア連合王国の支配一族は、サヌースィー族であった。しかし、英国軍事統治下でイドリースが制定した「サヌースィー家族法」によって、王ならびに皇太子以外の王族が政治ポストを得ることが禁じられた[Herb 1999: 191]。イドリースが親族の政治的関与を制限したのは、英国統治時代以前より王族内に亀裂が生じていたためである。1902年にサヌースィー教団2代目が没して以来、マフディー家(イドリースの家系)とシャリーフ家²⁵⁾は後継者を巡って対立していた。

リビア王国時代に入ると、イドリースはシャリーフ家だけではなくマフディー家の親族とも距離を置くようになる。例えば、イドリースは跡継ぎとなる実子に恵まれなかったため、実弟のムハンマド(Muḥammad al-Riḍā al-Mahdī al-Sanūsī)を皇太子としたが、このムハンマドが1955年に逝去した際に甥であるハサン(Ḥasan al-Riḍā al-Mahdī al-Sanūsī)を一年近く皇太子として承認しなかった。

このように、イドリースは他の王族とは疎遠になっていた²⁶⁾。このような状況下でイドリースが最も頼りにしたのが、宮廷内閣長官の立場にあったイブラーヒーム・シャルヒー(Ibrāhīm al-Shalḥī)という人物であった[Herb 1999: 194–195]。シャルヒー家は代々サヌースィー教団に仕えており、イドリースがエジプトに亡命をした際にも身の回りの世話から公的行事、政策決定まで全てを取り仕切った²⁷⁾。イドリースはイブラーヒームを実子のように頼りきり、その息子であるブーサイリー、ウマル、アブドゥルアズィーズの3兄弟を自分の孫のように可愛がったという。また、

23) 1951年の内閣組閣時に9つであった閣僚ポストは、1963年には15ポストに増加、最後のワニース・カッザーフィー内閣においては24ポストと3倍近くにまで膨れ上がった。

24) フサイン・マーズィクの娘が、シャルヒー家の次男ウマルに嫁いでいる。

25) サヌースィー教団には、マフディー・サヌースィー家とシャリーフ・サヌースィー家の2つの家系があり、長年後継者を巡って対立していた。2代目マフディーの死去に伴い、息子のイドリースが3代目となるはずであったが、当時12歳と幼かったためにシャリーフ家のアフマドが3代目となった。このアフマドは武勇で知られ、キレナイカの部族集団を率いエジプトから進入してくる英国と果敢に戦った。これに反してイドリースは、1918年に英国そしてイタリアと休戦協定を結び、1920年にはキレナイカ首長(amīr)の称号をイタリアから受けた。このような経緯があり、マフディー家との溝はますます深まっていった[Herb 1999: 189]。

26) イドリースには複数の妻があり、子供も数人生まれたが全員幼少時に亡くなっている。

27) イブラーヒーム・シャルヒーの生まれ故郷も大サヌースィーの出自と同じアルジェリアである。

実弟の皇太子が逝去した時期には、イブラーヒームの息子たちに権力の座を譲りたいために共和制への移行を望んだとも伝えられる〔Ben-Halim 1998: 56, 79–84〕。

このように宮廷内閣を牛耳っていたイブラーヒーム・シャルヒーであったが、1954年にシャリーフ家の一員から暗殺された。犯人はイドリースの妻であるファートイマの兄弟、ムヒッディーン (Muhy al-Dīn al-Sharīf al-Sanūsī) であった。この事件により、マフディー家とシャリーフ家の間の内在的な亀裂が白日の下に晒され、将来にわたって支配一族の協力体制が構築される可能性はほとんどなくなった。この暗殺事件以降、イブラーヒーム・シャルヒーの息子たちが王という名を借りて権力を握るようになっていく。ブーサイリー (1964年自動車事故で死亡) やウマルは宮廷内閣長官としてイドリースに仕え、末弟のアブドゥルアズィーズはクレナイカ防衛隊²⁸⁾の参謀長となってイドリースの身辺警護にあたった。

王政時代後半の宮廷内閣の構成は、ほぼクレナイカ出身者が独占していた。しかし、例外的にトリポリタニア出身のマフムード・ムンタシルが1965年からイドリースの私的顧問となっている²⁹⁾。リビア連合王国初代首相に就任したムンタシルは、1954年に健康上の理由で初代首相の職を辞任したものの、その後は英国大使、イタリア大使と大役を歴任して再び1964年に首相に就任した。その後はイドリースの私的顧問となって宮廷内閣に仕えた。

王国時代の支配アクターの構成についてまとめると、連邦制時代は地域間の均衡に注意を払いポスト配分が行われていたが、連邦制廃止 (1963年) 以降はクレナイカ出身者にポスト配分は大幅に偏った。この排他的な政治ポストの独占状態が、元来サヌースィー教団に対して忠誠心が希薄なトリポリタニア側に不満を抱かせる要因となったことは否めない。また、宮廷においてもシャルヒー暗殺事件 (1954年) をきっかけに支配一族の亀裂は表面化し、支配一族の協力体制は望むべくもなくなった。1960年代末になると、トリポリタニアを中心としてアラブ・ナショナリズムの影響が拡大し、国民の親米王政に対する不満はますます増大していった³⁰⁾。

IV. リビア・アラブ共和国時代の支配アクター

1960年代末、トリポリタニアを中心としてアラブ・ナショナリズムの勢いは最高潮となり連日反体制のデモが繰り返されていた。このような状況下でカッザーフィーらによる軍事クーデタは発生した。この節では、この1969年9月1日に発生した軍事クーデタの詳細を説明し、続けて1977年ジャマーヒーリーヤ新体制成立にいたるまでの主要政治アクターを、地域や部族の視点から分析する。加えて、カッザーフィーが新しい政権をどのように安定させたのかを考察していきたい。

1. 1969年軍事クーデタとリビア革命指導評議会 (RCC) メンバー

(1) 自由将校によるクーデタの経緯

まず、1969年9月1日にリビアで発生した軍事クーデタについて概観する。このクーデタを決行したのは、中級将校を中心とした約70人の自由将校団であった。この自由将校団の中心である

28) クレナイカ防衛隊は国軍よりも重装備であり、最新鋭の武器を備えていたと言われる。

29) 王国時代後半の主要閣僚ポストがクレナイカ出身者で占有される中、トリポリタニア・ムンタシル家は例外的に優遇された。マフムード・ムンタシルの出身集団であるムンタシル家は、王国時代に4人の閣僚を輩出する名望家であった。混乱を避けるために記しておく、マフムードの息子は1969年の軍事クーデタの3ヵ月後に英国大使を辞職したウマル・マフムード・ムンタシルである。カッザーフィー政権下で全国人民会議議長を務めたウマル・ムスタファー・ムンタシルは、マフムードとは親戚ではあるが親子関係は存在しない (2013年8月関係者より教示)。

30) 1964年2月22日、ナセルはリビア国内軍事基地の欧米への貸与を中止するよう演説を通じてイドリースに要請した。

リビア革命指導評議会(RCC)はクーデタの数年前に結成され、リビア全土に散らばる若手将校達を秘密裏に勧誘(オルグ)して来るべき日に備えていた[Blundy and Lycett 1987: 71-83]³¹⁾。

クーデタ当日、ラジオ局を占拠したカッザーフィーは電波を通じて国民にリビア・アラブ共和国(al-Jumhūriya al-‘Arabīya al-Lībīya)の建国を宣言し、RCCが共和国の最高意志決定機関であることを発表した。さらにカッザーフィーはこのクーデタを「革命」と位置づけ、国民に平等の権利や自由と統一の実現、社会主義を推進することを国民に約束した。特に、王国政府の欧米に追従するばかりの外交姿勢や、富の独占や賄賂が横行する腐敗した状況は激しく糾弾された³²⁾。

この演説の中で興味深いのは、旧トリポリタニア・スィルト(Sirt)出身のカッザーフィーが王国関係者の排除を訴えながら、先述したウマル・ムフタルやサヌースィー教団3代目指導者のアフマド・シャリーフなどキレナイカの英雄を讃えた点である。この言説は、カッザーフィーがアラブの団結の下にキレナイカ住民を排除しないという政治姿勢の表出だと考えることもできよう。さらに、サヌースィー教団のアフマド・シャリーフをリビアの英雄の一人として推挙したことは、イドリースとの長年の対立によって政治的に周辺化したアフマド・シャリーフ家に対する懐柔だと解釈することもできる。

(2) 革命指導評議会メンバーの経歴

クーデタから数日後、リビア・アラブ共和国は欧米諸国から承認され、同時にRCCもリビアの正式な政府機関として認められた。ここでは、リビア・アラブ共和国で最高権力を持つアクターであるRCCを部族・出身地域の点から明らかにしたい(表②参照)。

まず、RCCを出身地域別に考察する。結論から述べると、RCCは特定地域の出身者に偏重していなかった。ウバイディーが示したRCCメンバーの出身地を参照すると、西部出身者の占める割合は約42%、東部出身者は約33%、南部出身者は約17%、中部出身者は約8%の比率であった[Obaidi 2011: 115]³³⁾。つまり、西部と中部³⁴⁾はトリポリタニアなので合計すると50%となり、トリポリタニア出身者の割合がキレナイカ出身者の割合を上回る計算となる。カッザーフィーの出身がトリポリタニアなので同地域の比率が高いのはやむを得ないかもしれない。とはいえ、先述したリビア連合王国下の下院議員の出身地域構成(トリポリタニア64%・キレナイカ27%・フェザーン9%)と比べても、RCCのトリポリタニア出身者の割合は14%も低い。つまり、カッザーフィーにキレナイカ出身者を排除する意図はなく、むしろキレナイカ出身者に配慮しているようにさえ見える。

次に、RCCを部族の観点から考察する。革命直後、RCCは「有力部族出身ではない」「貧困家庭出身」という理由で、国民の大多数を占める貧困層から熱狂的な支持を得た。このRCCの中心であったカッザーフィーは、トリポリタニアのスィルト近郊に基盤を持つカッザーファ族の出身であった。このスィルト周辺のカッザーファ族は弱小部族であり、リビア王国時代は地方政府レベルであっても政治に関与した形跡はない。とはいえカッザーフィー自身は、フェザーンやトリポリタニアで教育を受け、キレナイカ・ベンガジの王立士官学校を卒業するなどリビア各地域を転々とした。

31) 王国時代の軍事基地は、ベンガジ(キレナイカ)、トリポリ(トリポリタニア、以下T)、タルフーナ(T)、フムス(T)、サブハー(フェザーン)に置かれた。

32) 前政権の腐敗・独占に対する激しい糾弾は、1969年クーデタ後の政府出版物からも確認ができる[リビア・アラブ社会主義人民ジャマヒリヤ在日人民局広報部1981]。

33) 小数点以下は四捨五入した。

34) アマル・ウバイディーが中部と示したのは、カッザーフィーの出身地であるスィルトである。

表② リビア革命指導評議会（1971 年）

	出身地域	経歴（ランク）	1971 年 1 月当時のポスト
ムアンマル・カッザーフィー	トリポリタニア	王立陸軍士官学校（大佐）	革命指導評議会議長
アブドゥッサラーム・ジャッルー	トリポリタニア	王立陸軍士官学校（少佐）	首相
アブー・バクル・マカリーフ	クレナイカ	王立陸軍士官学校（大尉）	在ベンガジ軍司令官 住宅大臣
バシール・フワーディー	フェザーン	王立陸軍士官学校（少佐）	アラブ・社会主義連合議長
アブー・バクル・ユヌス・ジャーバル	クレナイカ	王立陸軍士官学校（少佐）	軍参謀長
フワイルディー・フマイディー	トリポリタニア	王立陸軍士官学校（少佐）	教育大臣 民兵司令官
ムスタファー・ハルビー	トリポリタニア	王立陸軍士官学校（大尉）	軍謀報庁長官
ウマル・アブドゥッラー・ムハイシー	トリポリタニア	王立陸軍士官学校（大尉）	計画大臣
ムフタル・アブドゥッラー・カルウィー	クレナイカ	王立陸軍士官学校（少佐）	情報大臣
アブドゥルムニーム・ターヒル・フーニー	クレナイカ	王立陸軍士官学校（大尉）	内務大臣
ムハンマド・ナジュム	クレナイカ	王立陸軍士官学校（少佐）	外務大臣
アウドゥ・アリー・ハムザ	クレナイカ	王立陸軍士官学校（少佐）	RCC メンバー

（出所）[Europa Publications Limited 1951-69; Obeidi 2011]、各種報道を基に筆者作成

さらに、カッザーフィーに次ぐ RCC 内の実力者と目されたアブドゥッサラーム・ジャッルー（‘Abd al-Salām Jallūd）もやはり有力部族出身ではなかった。彼の出身部族はマカルハ族（al-Maqārḥa）であり、トリポリタニア内陸部ミズダで誕生している。このマカルハ族が居住するトリポリタニアの内陸部とフェザーンは、代々サイフ・ナースィル家の影響下にありマカルハ族もリビアの歴史において権勢を誇った時代はない。その他 RCC の出身部族についても有力部族出身者はいない。加えて、出身部族が不明な人物が 2 人おり、多数問い合わせをしたが部族名を特定することはできなかった³⁵⁾。リビア人でさえも知らない弱小部族出身、もしくはその人物が有名でなかった証左だと考えていだろう（表③参照）。

2. 王国関係者の粛清状況

それでは、どのようにカッザーフィーは旧政権関係者を粛清、もしくは包摂したのだろうか。王国関係者の大半は 1969 年クーデタ時に身柄拘束、もしくは自宅軟禁下におかれた。そして、翌 1970 年から前政権関係者に対する裁判が始まった。この裁判は人民裁判（mahkama al-sha‘b）と呼ばれ、バシール・フワーディー（Bashīr Huwādī）とウマル・アブドゥッラー・ムハイシー（‘Umar ‘Abd Allāh al-Muḥayshī）を中心とする RCC メンバーが裁判官を務めた。

この裁判で特筆すべき点は、旧政権関係者に対して激しい粛清が行われなかったことである。死刑が求刑されたのは、旧政権の最大権力者であった王のイドリースとシャリーフ家のアフマド・ズバイル（Aḥmad al-Zubayr al-Sanūsī）のみであった。とはいうものの、彼らの刑は執行されることはなく、クーデタ時に病氣療養中でトルコに滞在していたイドリースはそのまま亡命し、アフマド・ズバイルも 2001 年に恩赦で釈放された³⁶⁾。また、王族の中ではクーデタ当日に国王に即位したハサン・リダーが 3 年の懲役刑を言い渡されている。さらに、王国時代に影の最大権力者と目され

35) 本稿では情報提供者名を公表することは差し控えたい。著名な人々であることがその理由である。

36) アフマド・ズバイル・サヌーシーはシャリーフ家の出身であり、唯一王族の中で本格的な軍事訓練を受けた人物である。イラクの士官学校で 10 年近く訓練を積んだ。1934 年生まれである。

表③ リビア革命指導評議会(1977年)

	出身地域	出身部族	ジャマーヒーリーヤ体制成立直後の動向
ムアンマル・カッザーフィー	トリポリタニア	カッザードファ	全国人民会議書記長(国家元首格)
アブドゥッサラーム・ジャッルード	トリポリタニア	マカルハ	歴史的革命指導部 (事実上、政権ナンバー2)
アブー・バクル・ユヌス・ジャーバル	キレナイカ	ムジャープラ	歴史的革命指導部 (事実上、軍トップ)
フワイルディー・フマイディー	トリポリタニア	フマイーダート	歴史的革命指導部 (事実上、民兵司令官)
ムスタファー・ハルビー	トリポリタニア	アワーキール	歴史的革命指導部 (事実上、諜報機関トップ)
バシール・フワーディー	フェザーン	アシュラーフ	→1975年クーデタ未遂関与・逮捕
ウマル・アブドゥッラー・ムハイシー	トリポリタニア	カラーグラ	→1975年クーデタ未遂首謀者・亡命 1984年モロッコからリビアへ移送、その後処刑
ムフタル・アブドゥッラー・カルウィー	キレナイカ	不明	→1975年クーデタ未遂に関与
アブドゥルムニーム・ターヒル・フーニー	キレナイカ	不明	→1975年クーデタ未遂に関与 エジプト亡命
ムハンマド・ナジュム	キレナイカ	ナジュム	→1975年クーデタ未遂に関与
アウドゥ・アリー・ハムザ	キレナイカ	カラーグラ	→1975年クーデタ未遂に関与・逮捕
アブー・バクル・マカリーフ	キレナイカ	マカルバ	→1972年交通事故死

(出所) [Europa Publications Limited 1951-69; Obeidi 2011]、各種報道、聞き取り調査を基に筆者作成

たシャルヒー家も激しい粛清は受けず、シャルヒー兄弟の次男のウマルは終身刑を求刑されたが亡命、末弟のアブドゥルアズィーズは7年の懲役が確定した。

この人民裁判によって約220人以上の王国関係者が、選挙結果の操作、王室の汚職、社会運動に対する弾圧などの罪で罰金刑や財産没収を言い渡されている。しかし、恩赦によって旧政権関係者のほとんどは予定された刑期より早く釈放された[Bidwell 1998]。

地域や部族の視点からこの裁判を考察すると、トリポリタニア出身の旧政権関係者はほぼ人民裁判を受けていないことがわかった。唯一の例外は、王と密接な関係であったマフムード・ムンタシルであった。ムンタシルは王政期に2度も首相の座についたが、クーデタ直後に収監され原因不明で死亡している。

反対に、キレナイカ出身の旧政権関係者の多くは人民裁判を受けていた。特に首相経験者は全員裁判を受けている。けれども、懲役刑などの実刑が確定したのはマフディー・サヌースィー家とシャルヒー家の人間だけであり、他の人々は罰金や財産没収を宣告されているものの熾烈を極める粛清ではなかった。

他方、全く裁判の影響を受けていないキレナイカ出身者もある。例えば、王政前期に外務、法務、情報など多数の大臣経験があり、また宮廷内閣の一員でもあったアリー・サーヒリー(‘Alī al-Sāḥilī)などは1970年にはすでにベンガジ大学の教員として働き始めている。サーヒリーは王国時代当初より最側近の一人であったと思われるが、人民裁判を受けてはいない。この裁判結果から、RCCが旧勢力に形だけの制裁を与えていたことが推察できる。

1970年7月にも異例の赦免事例がある。フェザーンで多量の武器が発見され、旧王族(シャリーフ家)のアブドゥッラー・アービド(‘Abd Allāh ‘Ābid al-Sharīf al-Sanūsī)とフェザーンのサイフ・ナーシル家に政権転覆の嫌疑がかけられた[The Libyan Mail 1970 (July 26)]。しかし、アブドゥッラー・アービドやサイフ・ナーシル家に厳しい粛清が加えられたという事実は確認されていない。

3. リビア・アラブ共和国の支配アクター構成の変容

(1) 革命指導評議会——相次ぐクーデタの企て

1969年の軍事クーデタ自体は無血であったが、1969年から1977年まで体制内で多くの事件が発生した。例えば、カッザーフィーに対するクーデタ未遂、RCCメンバーの不自然な交通事故や突然の政権離脱などである。実際にクーデタの企てがあったのか、それともカッザーフィーが陰謀を図ったのか、などと今となっては知る手立てはないが、これまでに報道されたことを整理してみたい。

最初の事件は、クーデタ直後の1969年11月に発生した。初代内閣で防衛大臣の職にあったアードム・サイード・ハッワーズ(Ādam Sa'īd al-Hawwāz)と内務大臣のムーサー・アフマド(Mūsā Aḥmad)が、クーデタ未遂で逮捕された。彼らに対する嫌疑は、1969年12月7日にクーデタ決行を企てていたというものであった[*The Libyan Mail* 1969 (Dec. 14)]。両者とも旧リビア王国軍の中ではカッザーフィーよりも高位であり、クーデタに参加していなかった。当初、2人に対して終身刑が言い渡されたが、世論が激しく極刑を望んだために死刑が言い渡されたという。他方、この2人に率いられた27名の若手将校に対しては処分が下されなかった[Nyrop 1973: 153–154]。

結局、首相であるアフマド・スライマーン・マグリビー(Aḥmad Sulaymān al-Maghribī)³⁷⁾がこのクーデタに対する責任を取って辞職することになり、1970年1月にカッザーフィーが首相の座に就いた。カッザーフィーはすでにこの時点でRCC議長、防衛および内務大臣の3つのポストに就任していたが、この首相就任をきっかけとしてRCCの中で圧倒的な存在へと変貌していく。

1975年7月になると、カッザーフィーを狙った最大級のクーデタ計画が発覚した。このクーデタの企ての首謀者は、ウマル・アブドゥッラー・ムハイシー³⁸⁾を筆頭とする合計4名のRCCメンバーであった。

このクーデタが失敗に終わり、首謀者であるムハイシーとフーニーはチュニジアとエジプトにそれぞれ亡命し、彼らと同郷ミスラタ出身の約30名の将校が逮捕された(表③参照)。ムハイシーはカッザーフィーと高校時代から共に行動し、カッザーフィーとジャッルドの間柄と同じくらい親密な間柄であったと言われている。しかし、ムハイシーは出身地ミスラタの鉄鋼業に資金を投入し国内経済を活性化させたいと考えていた。ジョン・クーリー(K. John Cooley)によると、ムハイシーは国外の民族独立運動や反体制運動にカッザーフィーが莫大な資金提供をしていることに不満が募っており、時には公然とカッザーフィー批判を行っていたという[Cooley 1982]。カッザーフィーにとってクーデタを企てたとされたRCCの仲間たちは、アラブ社会主義「革命」の推進にとって最も疎ましい存在であったのは間違いない。

この1975年RCCクーデタ未遂事件により、RCCメンバーの半分以上が政治の世界から去った(表③参照)。リビアにおける最高意思決定機関であったRCCの機能は崩壊しつつあったが、反対にカッザーフィー個人支配体制の基盤は着実に固まりつつあった。

(2) 共和国内閣——キレナイカを分断したコオブテーション

リビア・アラブ共和国において最高意思決定機関はRCCであった。他方、内閣はほとんど実際の権限を持っていなかった。ならば閣僚構成を分析することはあまり意味を持たないのであろう

37) スライマーン・マグリビーは、イスラエルのハイファー出身で米国ジョージワシントン大学で博士号を取得した。エッソの弁護士としてリビアで働いていたが労働組合運動に身を投じ、1967年に王制に対してクーデタを企てた罪で収監されていた[U.S.Congress 1937: 161]。

38) ムハイシーは、オスマン帝国時代にトリポリタニアにやってきたチェルケス人の末裔であった。比較的裕福な家庭出身だったとも伝えられる。

か。酒井啓子は、閣僚構成を分析することは必ずしもその政権の性格を反映したものではないが、そこに現れる人事傾向は政府の国民に対する統治政策のひとつの表れと見なすことができると論じている〔酒井 2003: 4-5〕。酒井が論じるように公的機関に実際の政治権力が与えられていなくとも、その内閣の構成を分析することによってカッザーフィーがどのような集団を懐柔しようとしたかが見えてくるのではないだろうか。

実際、1969年から1977年まで続いたリビア・アラブ共和国内閣では、9回の組閣が行なわれている。当初、初代内閣の首相は弁護士出身のアフマド・スライマーン・マグリビーであり、軍人閣僚が2名いるもののRCCメンバーは入閣してはいなかった。しかし、この2人の軍人閣僚がクーデタの企てで逮捕されたためマグリビー内閣は1969年12月に総辞職し、その結果RCCメンバーが初入閣することになった³⁹⁾。1970年はRCCの登用が最多の時期で、1月の組閣で閣僚13人中5人、9月と12月の組閣で閣僚13人中8人のRCCメンバーが閣僚ポストを得た。しかし、すぐにRCC閣僚数は減り始める。最多登用の翌年にあたる1971年には3名、1976年には2名にと激減していき、それと反比例するように閣僚ポストの数は2倍以上に膨れ上がっていった。つまり、1970年のRCC閣僚の急増は革命の功労者に対する褒章的なポスト配分だと言えよう(表④参照)。RCCが閣僚人事から排除されていく一方、閣僚ポスト数は8年間で倍以上の21ポストに増加した。

RCC以外の共和国閣僚人事に目を向けるといくつか特徴がある。まず、サヌースー教団を頂点とする強い紐帯で結ばれたキレナイカ出身者が、新政権にコオプテーション(取り込み・包摂)されている。本稿では共和国時代の全閣僚の出自については明らかにできなかったが、しかし、カッザーフィー政権の比較的初期より、旧政権の中核に近い政治家の子弟や親戚が入閣していたことがわかった。その中でも特に伝統的に高い地位にあり、王に近い存在であったキレナイカの部族や名望家が新政府に包摂されたことは注目に値する。ただし、王国時代に最も多くの閣僚を送り出したバラサ族や、イドリースから血縁以上の信頼関係を得ていたシャルヒー家の人々は内閣から排除された。他方、トリポリタニア出身で最重用されたムンタシル家の人間も登用されることはなかった⁴⁰⁾。

それでは、どのような集団がコオプテーションの対象となったのか。重要な事例をいくつか明らかにしたい。まず一つ目の事例は、キレナイカのキーヒヤー家である。アントニオ・M・モローネがキレナイカのキーヒヤー家を“Political Dynasty”と評するように、同家はオスマン帝国からキレナイカのパシャに代々任ぜられていた名門家系であった〔Morone 2011〕。このキーヒヤー家で著名な人物は、ウマル・キーヒヤー(‘Umar al-Kīkhiyā)やファトヒー・キーヒヤー(Faṭhī al-Kīkhiyā)⁴¹⁾である。イドリースからの信頼も厚かったウマルは、キレナイカ首長国初代首相や王国議会上院議長などを歴任、息子のファトヒーはリビア連合王国初代内閣において法務大臣、教育大臣の要職に就任した。リビア・アラブ共和国時代に入ると、ファトヒーのいここにあたるマンスール・キーヒヤー(Maṣṣūr al-Kīkhiyā)が1972年7月に外務大臣に起用され、その後国連大使も務めた。1970年代の石油関連の外交交渉は全てRCCのジャッルードが関与したものの、語学が堪能で経験豊富なマンスール・キーヒヤーを頼りにしたのは想像に難くない。

同様に、キレナイカのウバイダート族もカッザーフィーのコオプテーションの対象となった。ウ

39) 1970年、リビア・アラブ社会主義党(ASU)議長にもRCCメンバーであるフワーディーが就任した。同年トリポリで第1回党大会が行なわれている。

40) ただし、ムンタシル家の出身者は全国人民委員会書記として1980年代に再登用されている。

41) ファトヒー・キーヒヤーはソルボンヌ大学で学士号を取得した。

表④ リビア・アラブ共和国内閣構成(1969-77年)

組閣日	閣僚 数	文民 閣僚	軍人 閣僚	RCC 閣僚	RCC 閣僚名 (ポスト名)	備考
1969年9月8日	9	7	2	0		
1970年1月16日	13	8	0	5	カッザーフィー (首相・防衛・内務) ジャッルード(副首相・地方) ムハイシー(経済・工業) フマイディー(教育) マカリーフ(住宅)	・A ウバイディー(労働) 初入閣 ・ユースス・ジャーバル軍特殊部隊司令官に就任
1970年9月16日	13	5	0	8	カッザーフィー (首相・防衛・内務) ジャッルード(副首相・地方) ムハイシー(経済・工業) フマイディー(教育) マカリーフ(住宅) フーニー(内務) カルウィー(情報) ナジュム(外務)	
1970年12月8日	13	5	0	8	カッザーフィー (首相・防衛・内務) ジャッルード(副首相・地方) ムハイシー(経済・工業) フマイディー(教育) マカリーフ(住宅) フーニー(内務) カルウィー(情報) ナジュム(外務)	・ナジュム(外務) 途中辞職
1971年8月13日	13	10	0	3	カッザーフィー(首相・防衛) ジャッルード(経済・工業・財政) フーニー(内務)	
1972年7月16日	18	15	0	3	ジャッルード(首相) フーニー(内務) ユースス・ジャーバル(行政)	・マンスール・キーヒヤー(外務) が初入閣 ・防衛相は空席
1972年11月2日	18	15	0	3	ジャッルード(首相) フワーディー(内務) ユースス・ジャーバル(行政)	
1972年11月14日	20	16	0	4	ジャッルード(首相) フーニー(内務) フワーディー(外務) ムハイシー(計画)	・A ウバイディー(労働・行政) ・M. キーヒヤー 1973年4月29日辞職
1976年10月23日	21	19	0	2	ジャッルード(首相) フーニー(内務)	
1977年3月2日	26	26	0	0	RCC 廃止	ジャマーヒーリーヤ体制成立

(出所) 各種報道の情報を基に筆者作成 *1977年は大臣ではなく、「全国人民委員会書記」である。

バイダート族は代々サースイー教団指導者を守護し、王国時代にはクレナイカ防衛隊を構成する主要部族であった。王制時代にウバイダート族の中で最も著名であったのは、ハーミド・ウバイディー(Hāmid al-'Ubaydī)である。ハーミドは、ウスマーン内閣で農業大臣に就任したのを皮切りに4期連続で計画大臣、マーズィック内閣では公共大臣、最後にワニース・カッザーフィー内閣では防衛大臣と約8年連続で大臣の職に就いた。1969年のクーデタの際にハーミドは逮捕され獄中死した。しかし、このハーミドの娘婿であるアブドゥルアーティー・ウバイディー('Abd al-'Aṭī al-'Ubaydī) が1970年に労働大臣に起用されている⁴²⁾。

42) キーヒヤー家、ウバイダート族の基本情報は Europa Publications Limited [1951-1969] から得たが、詳細については複数の王国関係者から教示を受けて修正をした。異なる教示があった際は、状況的に整合性が高いと思われる

軍事クーデタ直後の1970年、なぜウバイダート族は、特にアブドゥラーティーは将来が予測不可能なRCC政権に協力することを決めたのか。しかも、RCCは義父であるハーミドを獄中死させている。その答えは推測の域を出ないが、当時の状況を見るとRCCに協力するしかウバイダート族が生き残る道はなかった。反対にRCCの立場から考えると、旧体制派の中核を為すバラサ族とウバイダート族が分断できれば、恐らくどちらをコープテーションしても構わなかったはずである。歴史上、ウバイダート族は人口も領地もキレナイカの中で抜きん出ているが、王国時代に入るとバラサ族に押されぎみであった⁴³⁾。ウバイダートが再浮上するには、このチャンスを利用しない手はなかった。

また、伝統的に武勇の誉れ高いウバイダート族は新しい治安関連組織でも勢力を拡大する。RCC内部クーデタ(1975年)でRCCを中心とした若手将校達の団結が弛緩すると、アブドゥルファッターフ・ユヌス・ウバイディー(‘Abd al-Fattāh Yūnus al-‘Ubaydī)がカッザーフィーを警護する特別部隊の司令官となった。ただし、ユヌスは1969年のクーデタに参加したが、1970年代は他の2歳年長のハルビー、フマイディー、ユヌス・ジャバルが治安関連では台頭した。しかし、後年ユヌス・ウバイディーは事実上の軍のトップとして国家公安大臣、内務大臣を歴任し、ジャッルールドと並んでカッザーフィーの片腕と称された。

他方、RCC政権はトリポリタニアの部族や名望家に対する取り込みも包括的に行なっている。カッザーフィーは自身の出身部族・カッザーファがトリポリタニアの弱小部族であることをよく理解しており、ナフサ山地の有力部族集団(ラジュバーン族・ジントーン族)やトリポリやミスラータなど都市部の名望家に政治ポストを分配した。例として、1972年に情報大臣に就任したアブー・ザイド・ドゥールダ(‘Abū Zayd Dūrda)や財政大臣のムハンマド・ザルーク・ラジャブ(Muḥammad al-Zarūq Rajab)を挙げておく。

1975年から77年までの閣僚構成からは、キレナイカの紐帯を分断すると同時にトリポリタニアの有力者にも政治ポストをばら撒いて翼賛体制を作り上げようというカッザーフィーの意図が読み取れる。カッザーフィーは1969年の革命宣言で旧勢力の排除を約束したが、実際のところは王政時代の権力の中枢を担ったキーヒヤ一家とウバイダート族を中心にコオプテーションを行った。既存の研究では、このような事実が指摘されたことはない。カッザーフィー体制は旧勢力のコオプテーションによって安定化し、さらに次の段階に向かっていくのである。

VII. おわりに——1977年ジャマーヒーリーヤ体制成立

本稿では、1969年クーデタを境とした旧新政権の支配アクターを分析することによって、政権移行期にカッザーフィーがどのように体制を安定させたのかを明らかにした。革命宣言の中で、カッザーフィーは旧政権関係者を徹底的に排除し平等な社会の実現を国民に約束したものの、実際には部族社会や地域性を巧みに操作して体制基盤を安定に向かわせた。

まず本稿では、リビア独自の地域性や部族社会がどのように形成されたのかを説明した。トリポリタニアではイタリア支配の影響で民主的な政治風土が育っており、部族や名望家など集団間の関係が比較的水平であったが、一方でキレナイカやフェザーンではサヌースィー教団を頂点として上位下達のシステムが域内で完成していた。リビアからイタリアが撤退後、これら3つの地域は連邦制という枠組みで歴史上初めて統合され、リビア連合王国として1951年に独立した。

情報を採用した。

43) 19世紀末、ウバイダート族とバラサ族は領地をめぐる30年間以上戦いを続けた[Evans-Pritchard 1949]。

次に、この王政時代の政治アクター構成を出身地域や部族の視角を用いて考察した。元々、王の出身集団であるサヌースィー族には、安定した王政に不可欠な支配一族の規模や協力体制が備わっていなかった。イドリースには跡継ぎとなる実子がおらず、頼りとなる他の王族との間には暗殺事件が発生し支配一族の協力体制がその後も見込めない状況となった。しかし1963年までは王国政府の閣僚や上院議員のポストは地域別に分有されており、かろうじて地域間・部族間の均衡が保たれ政権自体は不安定化しなかった。また、3つの地方政府が国家の中に存在することによって地元部族へ配分するポスト数が十分に用意され、かつ彼らが持つ伝統的既得権益も守られていた。

しかしながら1963年に連邦制が突然廃止されると、地方政府のポストを失ったキレナイカ地方政府の旧閣僚たちは、限りある王国政府や宮廷内閣の大臣ポストのほとんどを独占するようになった。特に、支配一族の中で孤立したイドリースを支えるシャルヒー家とバラサ族に権力が集中し、このような富の排他的独占状態が元来サヌースィー教団に対する忠誠心が希薄なトリポリタニア側の不満を募らせる新たな要因となっていく。1960年代末はほんの少しのきっかけさえあれば、王政が転覆する脆弱な状況にあった。このような状況下、カッザーフィーはアラブ・ナショナリズムと共に突然出現した。アラブの統一を声高に叫んだカッザーフィーは、王政時代に構築された官僚機構や出自に依拠した社会階級を破壊する「革命」を行なうことを国民に約束する。

とはいうものの、カッザーフィーはリビアの歴史や社会を熟知した政治運営を行なう。まず、王政時代に利権を独占したと名指しされた王族や旧政権関係者の粛清は徹底的なものではなかった。さらに、トリポリタニアの弱小部族出身のカッザーフィーは、キレナイカ最有力部族の一翼をコオプテーションした。王国時代のキレナイカのウバイダート族は、治安関連組織の主要な構成集団ではあったものの、イドリースと親戚関係であったバラサ族以上に権力を得ることは困難な状況にあり、常に二番手の存在であった。つまりRCC政権下においてウバイダート族は、カッザーフィーに協力する他にサバイバルする道はなく、反対に弱小部族出身者の集団であるRCCにとってキレナイカの有力部族であるウバイダート族は利用価値が高い存在だったといえよう。要するに、相互依存状態だったのである。

結局、1969年以降のリビアにおける新しい政権が安定に至った要因は何だったのか。それは、カッザーフィーがクーデタ直後にイドリースを頂点とするキレナイカの紐帯を分断し、その片方を包摂したことであった。つまり、カッザーフィーは「革命」宣言通りに旧勢力を排除したわけではなかったのである。

「革命」から8年後の1977年3月、カッザーフィーはトリポリの西方に位置するザーウィヤで『直接民主主義』に基づく大リビア・アラブ社会主義人民ジャマーヒーリーヤ国(al-Jamāhīriya al-‘Arabīya al-Lībīya al-Sha‘bīya al-Ishtirākīya al-‘Uzmā)の建国を新たに宣言した。カッザーフィーが発表したジャマーヒーリーヤとは、各コミュニティごとに設置される『基礎人民会議』を通して18歳以上の全国民が政治参加できる制度である。興味深いことに、1977年のジャマーヒーリーヤ体制成立時には、1951年の王国独立時と似て非なる人事が行なわれた。トリポリタニア出身者のカッザーフィーが全国人民会議議長(国家元首級)に、キレナイカ出身のアブドゥラーティー・ウバイディーが全国人民委員会書記長(首相級)に就任した。

振り返ると、王国時代初期の安定もトリポリタニアとキレナイカの均衡と部族の既得権益を守ることによって保たれていた。本稿の結論から、「2月17日革命」以降の混乱を收拾する糸口を探すことはできないだろうか。

参考文献

<日本語文献>

- オーウェン, ロジャー 2015『現代中東の国家・権力・政治』(山尾大・溝渕正季訳) 明石書店.
酒井啓子 2003『フセイン・イラク政権の支配構造』 岩波書店.
衆議院法制局 1955『リビア連合王国憲法』(和訳各国憲法集 33) 衆議院法制局.
宮地一雄 1978『アフリカ現代史Ⅴ 北アフリカ』(世界現代史 17) 山川出版社.
リビア・アラブ社会主義人民ジャマヒリヤ在日人民局広報部 1981『人民主権の紹介』 リビア・アラブ社会主義人民ジャマヒリヤ在日人民局広報部.

<外国語文献>

- Ahmida, Ali A. 2009. *The Making of Modern Libya: State Formation, Colonization, and Resistance*. Albany [N.Y.]: SUNY Press.
Anderson, Lisa. 1986. *The State and Social Transformation in Tunisia and Libya, 1830–1980*. Princeton: Princeton University Press.
Ben-Halim, Mustafa A. 1998. *Libya: The Years of Hope: The Memoirs of Mustafa Ahmed Ben-Halim, Former Prime-Minister of Libya*. London: AAS Media Publishers.
Bidwell, Robin. 1998. *Dictionary of Modern Arab History: An A to Z of Over 2000 Entries from 1798 to the Present Day*. London: Kegan Paul.
Blundy, David. and Andrew Lycett. 1987. *Qaddafi and the Libyan Revolution*. Boston: Little, Brown.
Cooley, John K. 1982. *Libyan Sandstorm*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
Evans-Pritchard, Edward E. 1949. *The Sanusi of Cyrenaica*. Oxford: Clarendon Press.
Europa Publications Limited. 1951–1969. *The Middle East and North Africa*. London: Europa Publications.
Fortes, Meyer and Edward E. Evans-Pritchard (eds.). 1940. *African Political Systems*. London: the Oxford University Press.
Habib, Henry. 1979. *Libya Past and Present*. Valletta, Malta: Edam Pub. House.
Harris, Lillian C. 1986. *Libya: Qadhafi's Revolution and the Modern State*. Boulder: Westview Press.
Herb, Michel. 1999. *All in the Family: Absolutism, Revolution, and Democracy in Middle Eastern Monarchies*. Albany: SUNY Press.
Khadduri, Majid. 1963. *Modern Libya: A Study in Political Development*. Baltimore: The Johns Hopkins Press.
Mattes, Hanspeter. 2011. "Formal and Informal Authority in Libya since 1969," in Dirk Vandewalle (ed.), *Libya since 1969: Qadhafi's Revolution Revisited*, New York: Palgrave Macmillan, pp. 55–81.
Morone, Maria A. 2011. "Post-Qadhafi's Libya in Regional Complexity," *ISPI Analysis* (116)
< http://www.ispionline.it/sites/default/files/pubblicazioni/analysis_116_2012.pdf >
(2016年7月14日閲覧)
Nyrop, Richard F. 1973. *Area Handbook for Libya*. Washington, D.C.: Stanford Research Institute and American University.
Obeidi, Amal S. 2011. "Political Elites in Libya since 1969," in Dirk Vandewalle ed., *Libya since 1969: Qadhafi's Revolution Revisited*, New York: Palgrave Macmillan, pp. 105–126.
Pargeter, Alison. 2012. *Libya: The Rise and Fall of Qaddafi*. New Haven: Yale University Press.
St. John, Bruce R. 1987. *Qaddafi's World Design: Libyan Foreign Policy 1969–1987*. London: Saqi Books.

- . 2002. *Libya and the United States: Two Centuries of Strife*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- U.S.Congress. 1973. *Multinational Corporations and United States Foreign Policy*. Hearings, Ninety-third Congress [Ninety-fourth Congress, second session]. Washington: U.S. Govt. Print. Off.
- Vandewalle, Dirk J. 1998. *Libya since Independence: Oil and State-building*. Ithaca, N.Y.: Cornell University Press.
- . 2011. *A History of Modern Libya*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wright, John. 2010. *A History of Libya*. New York: Columbia University Press.

<新聞記事>

- The Libyan Mail*. 1968 (August 4). “Bakush Calls for Co-operation from Arab Countries,” *The Libyan Mail*.
- . 1969 (December 14). “The Coup Attempt Crushed,” *The Libyan Mail*.
- . 1970 (July 26). “New Coup Plot Uncovered: Arms Cache Found in Fezzan,” *The Libyan Mail*.
- Toler, L. U. 2013 (February 6). “GNC Decides on Elections, Adrian Pelt Would Be Pleased,” *Libya Herald*.

<ウェブ新聞>

- Al-Arabya News* < <http://english.alarabiya.net/> >
- Asharq al-Awsat* < <http://www.aawsat.net/> >
- Al-Wasat* < <http://www.alwasatnews.com/> >
- Libya al-Mostakbal* < <http://www.libya-al-mostakbal.org/> >
- Libya Herald* < <http://www.libyaherald.com/> >
- Magharebia* < <http://magharebia.com/> >
- The Tripoli Post* < <http://www.tripolipost.com/> >
- The Guardian* < <http://www.theguardian.com/uk> >